

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(202 .12)令和 年度:

,

コロナ禍における単身女性後期高齢者の生活と思い

学生氏名 宮本愛未 野田琳花
(指導：藤井智子 水口和香子)

緒言

高齢者は住み慣れた地域で人生の最期まで暮らしたいと思っている¹⁾一方、身体機能・認知機能の低下によって、単身で暮らすことに不自由を感じたり、不安を抱えていたりする可能性^{2, 3, 4)}がある。特に、単身高齢者は、家族・親戚・友人・知人・近隣の人などによる専門職以外の人との関係の中でやりとりされる支援であるインフォーマルサポートが生活支援において重要な役割を果たしている⁵⁾。また、高齢者は社会活動に参加することによって、生きがいを感じているという研究結果⁶⁾があるが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、現在も制限のある生活を余儀なくされ、単身高齢者にとって、インフォーマルサポートを含む生活への影響は大きい^{7, 8)}。しかし、新型コロナウイルス感染症が高齢者に及ぼす影響の研究では、インフォーマルサポートを含む生活の実態については明らかにしていない。よって、コロナ禍における単身高齢者のインフォーマルサポートを含む生活について明らかにし、単身の生活を維持する際の支援の示唆を得ることを目的とする。

方法

研究対象：B市1地区在住の75歳以上の単身女性後期高齢者で、インフォーマルサポートを受けている者のうち、同意を得られた者とした。女性の方が配偶者と死別し、単身となっている割合が高いと考え、後期高齢者の女性を研究対象とした。

調査方法：2022年6月23日～8月の期間に対象者を訪問し、研究者2名で1時間程度、対面で半構造化面接を行った。その際、対象者の理解を得てインタビュー内容を録音した。

調査内容：インタビューガイドは次の4項目とした。①対象者の属性(氏名、年代、家族構成、単身歴、居住歴)②現在の生活の中でのインフォーマルサポートについて③コロナ禍前後でのインフォーマルサポートの変化について④インフォーマルサポートの変化に対する思い

分析方法：録音データから逐語録を作成し、コロナ禍における生活と思いに関する内容を抽出し、コード化した。コード化を意味内容により類似分類し、サブカテゴリを作成し、抽象度を上げたカテゴリを作成した。分析の全過程において、研究者と指導教員で分析・結果の妥当性を検討した。

倫理的配慮：本学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号22025)。研究参加前に、対象者からインフォームド・コンセントを取得した。同意は対象者の自由意思であり、同意しない場合や同意後に意思が変わった場合でも不利な扱いを受けないこと、個人情報保護、研究終了後のデータの破棄について文書と口頭で説明した。

結果

対象者の基本属性は表1に示す。インタビュー時間は平均64分であった。

表1 対象者の基本属性

	年代	家族構成	単身歴	居住歴
A	70代後半	娘(隣町)、孫、ひ孫	29年	22年
B	80代前半	長女(市内)、次女(遠方)	15年	13年

分析の結果、287のコード、13のサブカテゴリ、5のカテゴリが生成された。コロナ禍における単身女性後期高齢者の生活と思いを表2に示す。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリ< >で示す。

対象者は【限られた移動手段】の中で、【健康維持するための工夫】を行い、【加齢に伴う暮らしの適応】をしていた。思いとしては、【コロナ禍による交流が減少する寂しさ】がある一方、【近い人との変わらない交流への満足感】があった。

表2 コロナ禍における単身女性後期高齢者の生活と思い

カテゴリ (5)	サブカテゴリ (13)
限られた移動手段	車を手放し家族の世話になることを遠慮する
	バスでの移動で必要な買い物はできている
健康維持するための工夫	体操や歩くことで足腰の機能を維持している
	コロナの感染予防をしている
加齢に伴う暮らしの適応	疾患や症状と付き合っ て暮らしている
	病院が近く暮らしやすい
	加齢を受け入れつつ一人暮らしのライフプランを考えている
コロナ禍による交流が減少する寂しさ	コロナ禍で遠方に住む家族に会いにくく寂しい
	コロナによって街に出る人が減り寂しい
	コロナで地域活動がなくなった
	コロナで市外への行動範囲が縮小した
近い人との変わらない交流への満足感	近くに住む家族との変わりのない関係に安心している
	近隣住民・職場の友人との変化のない交流を楽しんでいる

考察

1. 単身女性後期高齢者の生活

単身の女性後期高齢者は、<車を手放し家族の世話になることを遠慮する>思いを持ち、<バスでの移動に必要な買い物はできている>ことから、【限られた移動手段】の中、自身で行える範囲の生活を営んでいたといえる。また、<体操や歩くことで足腰の機能を維持している>、<コロナの感染予防をしている>というように、加齢の変化や新型コロナウイルス感染症蔓延に対して【健康維持するための工夫】をしていた。高齢者は多くの場合、持病を抱えており、<疾患や症状と付き合っ暮らしている>。<病院が近く暮らしやすい>ことは、居住地区の特徴であり、体調不良時に受診できる利便性があることを示しており、<加齢を受け入れつつ一人暮らしのライフプランを考えている>といった【加齢に伴う暮らしの適応】をしている。ハヴィガーストの老年期における発達課題の1つに『体力と健康の衰退への適応』が挙げられる⁹⁾。したがって、加齢や環境の変化に対して自分ができることを行い、体力や健康の衰退に適応し、自分らしく自立した生活を送っていると考えられる。

2. コロナ禍における生活への思い

コロナ禍において、【コロナ禍による交流が減少する寂しさ】と、【近い人との変わらない交流への満足感】の2点が思いとして挙げられた。

寂しさとしては、<コロナ禍で遠方に住む家族に会いにくく寂しい>、<コロナによって街に出る人が減り寂しい>という思いがある。また、<コロナで地域活動がなくなった>ことや旅行や市外に行くことが減り、<コロナで市外への行動範囲が縮小した>。これらのことから、遠方に暮らす人との交流が縮小し、交流減少による寂しさが生じていると考えられる。新型コロナウイルス感染症の流行により余暇活動の制限があることで抑うつや不安感が強くなるという結果¹⁰⁾が示されており、寂しさが蓄積されると、抑うつや不安につながる恐れがあると考えられる。一方、<近くに住む家族との変わりのない関係に安心している>、<近隣住民・職場の友人との変化のない交流を楽しんでいる>状況が続いていることも明らかとなった。後期高齢者同士は、話す、相談するといった精神的な付き合いが多い¹¹⁾とされ、本研究においても、近隣住民や友人と話すことを中心とした精神的な交流は途切れることなく満足していた。このように、コロナ禍であっても身近な人との交流は変わらず、親密な関係を築き、精神的健康を維持しているといえる。以上のことから、人との交流は、高齢者の心身の健康を維持することにつながっていると考える。

3. 単身生活を維持する際の支援の示唆

単身で暮らす女性の後期高齢者は、感染予防や運動など健康を維持するための工夫を行いながら、加齢に伴い暮らしを適応させている。また、コロナ禍での交流減少による寂しさを感じている一方、コロナ禍においても、家族や友人などの近い人との交流は継続され、安心感や満足感を得ながら生活している。よって、支援者は、交流の場の参加状況や交流の方法を把握する必要があ

る。そのうえで、後期高齢者のニーズに応じて、感染予防を講じながら、他者との交流の場を維持する支援が必要であると考えられる。さらに、今後加齢や疾患によって、ADLが低下し、移動が困難となる可能性があるため、地域で行っている移動支援事業などを周知することも方策の一つであると考えられる。

研究の限界

今回の研究では、1地区のみで対象者が2名であったため、一般化することは困難であると考えられる。よって、対象地域や対象者数を拡大し、一般化していくことが今後の課題である。

謝辞

本研究にご協力頂いた対象者の方々、地域包括支援センター保健師の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2016) : 厚生労働白書, pp. 47-49.
- 2) 小川栄二, 新井康友, 朴仁淑 (2019) : 北東アジアにおける高齢者の生活課題と社会的孤立—日本・韓国・中国・香港の今を考える, クリエイツかもがわ.
- 3) 伊藤ふみ子, 田代和子 (2020) : 独居高齢者の社会的孤立に関する文献検討, 淑徳大学看護栄養学部紀要 12号, pp. 69-77.
- 4) 涌井智子 (2020) : 国民生活基礎調査からみる独居高齢者のケアの実態と今後への示唆, 老年精神医学雑誌, 31(5), pp. 467-473.
- 5) 畠山明子 (2013) : 単身高齢者の非親族関係によるインフォーマルサポートについて—ライフストーリー分析の試み, 北海道社会福祉研究, 33, pp. 1-16.
- 6) 小石真子, 小笠原知子, 梅津のぞみ他 (2002) : 高齢者の健康度と社会活動について, 日本健康医学会雑誌, 11(1), pp. 13-18.
- 7) 大内潤子, 林裕子, 松原三智子他 (2021) : 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止策が地域在住高齢者の活動および主観的健康に与えた影響—北海道の感染第1波における検討, 日本看護研究学会雑誌, 44(4), pp. 599-609.
- 8) 長谷麻由, 原口健三 (2021) : 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 禍における地域在住高齢者のエゴ・レジリエンスと健康維持活動およびフレイル傾向との関連, 理学療法科学, 36(4), pp. 515-520.
- 9) 北川公子 (2018) : 系統看護学講座専門分野II 老年看護学, 第9版, p17表1-5, 医学書院.
- 10) 前場洋佑, 小林昭博, 今井忠則 (2022) : COVID-19 流行下における地域高齢者の余暇活動の制限と抑うつ・不安感との関連, 老年社会科学, 44(2), p165.
- 11) 古川恵子, 友清貴和 (2003) : 高齢・過疎地域における高齢者の生活を支える付き合いの広がりに関する研究, 日本建築学計画系論文集, 568, pp. 77-84.